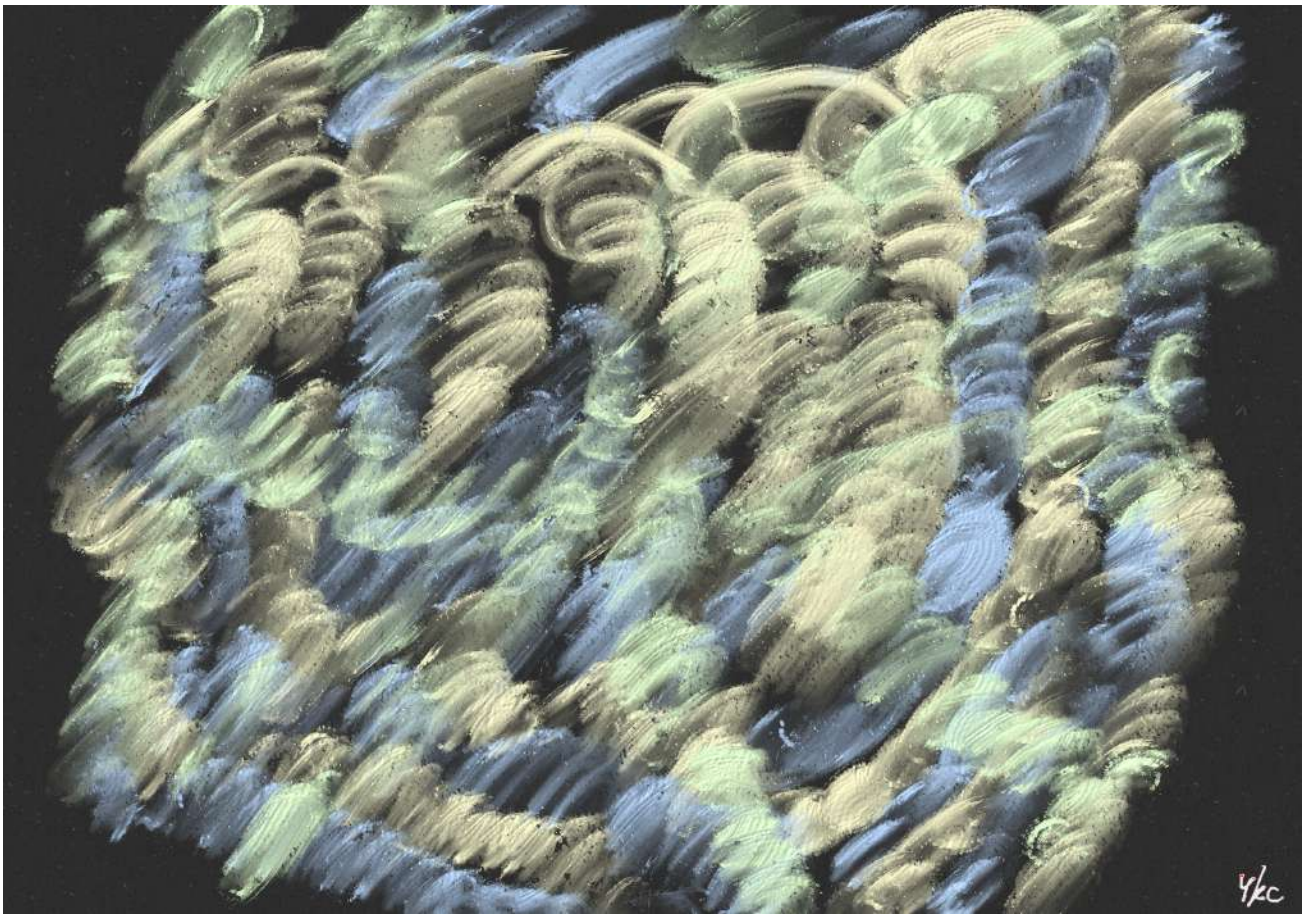
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 301

Website:「発達理論の学び舎」



No.915 就寝前の音の流れ_A Flow of Sounds Before Going to Bed

© YOHEI KATO 2020

目次

6001. 節目を迎えて：関係性とコミュニケーションの歪みの是正に向けて
6002. 実践的かつ規範的なメタ理論の構築に向けて：アブダクション思考の活用
6003. 今朝方の夢と教会旋法の響き
6004. インテグラル理論や日本で普及する成人発達理論の盲点：発達に伴う規範性の議論と実践
6005. エンリケ・ダッセルの善の思想
6006. テクノロジーと現代の課題：霊性学と美学に関する規範的かつ実践的なメタ理論について
6007. 今朝方の夢
6008. 内在化されたイデオロギーを外在化すること：批判的実在論とインテグラル理論の補完関係
6009. 美しい朝焼けを眺めて：ジョン・ラスキンとの夢での出会いを思い出して
6010. 今朝方の夢
6011. 関係性と創造性及び対話の大切さ
6012. 活気が戻ってきたフローニンゲン：宇宙空間の果てに飛び立つ知覚体験
6013. ロイ・バスカーへの共感の念
6014. フローニンゲンとアテネの気温差：読書と創作活動
6015. 憤りを感じさせる今朝方の夢
6016. シャドーに関する規範的な議論と実践の必要性～無意識という生態系
6017. 倫理学・道徳学・価値論を通じた霊性探究：今朝方の夢の続き
6018. ジャン・ゲブサーの書籍と悪に関する書籍：規範的対話の必要性
6019. 今というこの瞬間を人生の最後の瞬間と同じように生きること
6020. 霊性の物質化の進行と本日届いた書籍について

© YOHEI KATO 2020

6001. 節目を迎えて:関係性とコミュニケーションの歪みの是正に向けて

時刻は午後7時を迎えた。今、フローニンゲン上空の空に夕日が輝いている。今日は本当に素晴らしい天気であり、1日を通して幸せな気持ちを感じていた。確かに幸福感は、日々いかような天気の最中にあっても感じているのだが、やはり晴れの日の幸福感は格別である。

気がつけば、日記の数が6000を超えた。いつもこうした節目に、これまでの歩みについて思う。歩いている最中には自分が歩いていることすら気づかないこともあるのだが、ふとこうした節目に辿り着いて後ろを振り返ってみれば、自分が日々少しずつ歩き、そして長い距離を歩いて来たことに気づく。

この6000の日記は間違いなく自分の歩みに他ならず、そこに自分の全てが現れているような気がする。それらの日記を執筆したのは過去の自分だが、それらの日記の中にすでに今の自分がいたのではないかと思う。日記は絶えず今を綴っており、その中に過去･現在･未来の全てがある。そうした1つの時の中で、これからも絶えず日記を書き綴っていきたいと思う。人生の最後の日まで、日記と共にあり、日記として生きていく。自己という存在は1つの尊い物語なのだから。

先ほど、改めて午後に訪れたノーダープラントソン公園の清々しさを思い出していた。公園の中には小さな森のような場所があり、そこを通り抜けていたときに、その静けさに癒された。そして、そうした静けさの中で時折小鳥たちの鳴き声が聞こえて来て、それがまた心を大いに癒してくれた。自然の中には大いなる癒しがある。そのようなことを思い、オランダかフィンランドの自然の中で将来生活を営むことについてゆっくりと検討していこうと思った。

この時間帯になって、今朝方見ていた夢の場面についてまた少し思い出すことがあった。夢の中で最初のキャリア時代のオフィスにいたのだが、そこで女性のマネージャーがと会話をしていた際に、その方にお子さんがいることに対して驚いていたのを覚えている。その方が結婚していることは最初から知っており、子供は当分作らないと言っていたこともあってそれを驚いたのである。また、なんとお子さんがもう中学生になっていたことにも大変驚いた。そのような夢の場面があった。

午後に散歩をしていた時に考えていたコミュニケーションについて、また少し考えていた。人は関係性によって癒され、関係性によって変容する。そして現代を覆っているのは、様々な関係性におけ

る種々の歪みである。それはコミュニケーションの歪みに1つの端を発している。コミニケーション上の歪みを是正し、関係性の歪みを是正していくこと。ここでいう是正というのは、治癒と変容の双方を含む。癒しながらにして変容をさせていくこと。それが必要だ。

ハーバマスは現代を取り巻くコミニケーションの病理に関するヒントをいくつも提示してくれている。手持ちのハーバマスの書籍、そして来月に一括注文する書籍をゆっくりと読み進めていき、このテーマについても関与をしていきたい。それは、実践美学と実践霊性学を通してになるだろうか。フローニンゲン:2020/7/13(月)19:25

6002. 実践的かつ規範的なメタ理論の構築に向けて:アブダクション思考の活用

時刻は午前6時を迎えた。昨日は天気がとても良かったが、今朝は午前中から夕方まで小雨が降るとのことである。実際に今も空には雲がかかっていて、今朝は朝日が拝めそうにない。

昨夜、メタ理論について少しばかり考えていた。そのきっかけを生んでくれたのは“Metatheory for the Twenty-First Century: Critical Realism and Integral Theory in Dialogue”という書籍だ。昨日はハーバマスの“Knowledge and Human Interests”の初読を終え、夜に上記の書籍を読み始めた。本書には敬愛する哲学者のザカリー・スタインの論文が収められていて、彼の論文を読みながら、メタ理論について少しばかり考えていた。

メタ理論と一口に言っても様々なものがある。例えば、システム理論のような学際的なメタ理論があり、批判的実在論やインテグラル理論のような哲学的なメタ理論があり、メタ心理学のように領域固有のメタ理論がある。今私が関心を持っているのは、実践的かつ規範的な霊性学と美学であり、それらを架橋するようなメタ理論を構築していくことである。メタ理論には様々な種類があるため、今自分が関心を架橋する実践的かつ規範的なメタ理論を構築することも何らおかしなことではないのではないかと思う。

実践的かつ規範的なメタ理論は、既存の科学的理解や既存の慣習を超える形で、これからのあるべき人間や社会に関する規範を明示する。そしてそれは、私たちが人間や社会を理解する方法を再創造するものである。霊性学と美学を架橋するようなそうしたメタ理論を一生涯を通じて構築していければと思う。

そういえば、ハーバマスの書籍を読んでいる最中に、チャールズ·サンダース·パースが述べる「アブダクション」について考えていた。アブダクションとは端的には仮説的な思考様式のことを指す。自分の日々の日記は、知らず知らずのうちにそうした思考方法を用いていることに気づく。ハーバマスが述べるように、それは説明仮説を形成するものであり、知の領域を広げていくものである。

説明仮説は検証可能性を有する。そうした仮説を日々形成し、日々検証していく。今日もまたアブダクション的な思考で日記を執筆していこうと思う。それは日記の執筆に留まらず、作曲実践や絵画の創作にも活用できるだろう。今日もまた新しい可能性に向かって自己を開いていき、小さな発見と学びを得られるような1日にしたい。フローニンゲン:2020/7/14(火)06:22

6003. 今朝方の夢と教会旋法の響き

時刻はゆっくりと午前6時半に近づいて来ている。まだ雨は降り始めていないが、今日は気温が低くなる。最高気温は18度、最低気温は9度とのことである。今日は昼過ぎに1件ほどオンラインミーティングがあるが、それ以外は自由に使える時間のため、創作活動と読書に励んでいこう。1日にではなく、1週間に2件ほどのオンラインミーティングが理想であり、今週はまさにそうした理想的な週である。今のところ来週もそのような形で1週間を過ごせそうで何よりである。

今朝方はそれほど印象に残る夢を見ていなかったが、ぼんやりと記憶に残っていることがあるので、それらについて書き留めておこう。夢の中で私は、ある女性の知人が見知らぬ男性と仲良く話している場面に遭遇した。2人は交際関係にあるのかわからないが、とにかく楽しげに話をしていた姿を覚えている。その他に覚えていることと言えば、夢の中の私は、実際に通っていた高校の教室にいて、英語の授業を受けていたことである。授業が終わってから、先生と2、3何かについて話をしていたように思う。それは英語に関するものだったか、進路に関するものだったかだと思う。

今朝方の夢で覚えているのはそれぐらいしかない。今朝方の無意識の世界は落ち着いていたようだ。あるいは、夢を生み出す以外の形で何かが働いていたのかもしれない。食べ物を消化するかのように、その日の体験を夢を見ることを通じて整理するのでなく、何か深層的な形での治癒が行われていたのかもしれないという見方もできる。なぜなら、夢を見るのはサトル意識の状態であり、夢を見ないというのはそれよりもさらに深いコーザル意識の状態であって、深層的な治癒はそうした

コーザル意識の状態で起こるからである。そのようなことを考えてみると、昨夜の私は、体験の整理というよりも、深層的な治癒を体験していたと言えるかもしれない。

昨日、数日前から取り掛かり始めたハーモニーの書籍を参考にして、作曲実践をしている時間があった。ちょうど該当の章が教会旋法を用いたハーモニーを扱っていて、その響きに色々と感じるものがあった。理由はよくわからないが、教会旋法の響きが今の自分の美的感覚に何かを訴えかけてくる。昨日の段階で教会旋法に関する全ての譜例を参考にできたわけではないので、今日の作曲実践ではその続きに取り掛かろうと思う。

教会旋法を用いたハーモニーの響きの性質と構造をまた少し理解できたらと思う。この日記を書き終えたら少しばかり絵を描き、そこから作曲実践に取り掛かる。今日の自分からどのような絵と音が生まれるのか楽しみであり、それを通じて自分がどのような新しい発見や気づきを得ていくのか、そして自分がどのようにまた少し変化するのかを楽しみにしている。フローニンゲン：2020/7/14（火）06:37

6004. インテグラル理論や日本で普及する成人発達理論の盲点：発達に伴う規範性の議論と実践

時刻は午前9時半を迎えた。早朝にいつものように絵をいくつか描き、4つほど曲を作った後に読書に取り掛かった。昨夜より、“Metatheory for the Twenty-First Century: Critical Realism and Integral Theory in Dialogue”という書籍を読み進めており、先ほど、かつて私がジョン･エフ･ケネディ大学で在籍していた統合心理学プログラムで教鞭を奮っていたション･ハーゲンス博士が執筆した論文“Developing a complex integral realism for global response: Three meta-frameworks for knowledge integration and coordinated action”に目を通していた。タイトルにあるように、ハーゲンス博士は、3つのメタ理論を比較し、さらなる知と実践の創造に向けて、それらを統合しようとするメタ･メタ理論の方向性を示している。ここで取り上げられている3つのメタ理論とはそれぞれ、ケン･ウィルバーのインテグラル理論、ロイ･バスカーの批判的実在論、エドガー･モリンの複雑性理論である。

それぞれのメタ理論には強く焦点が当てられている人称言語的領域があり、同時に希薄な人称言語的領域がある。例えば、ウィルバーのインテグラル理論は1人称的な探究に最も焦点が当てられていて、次に2人称的領域、最後に3人称的領域に焦点が当てられている。バスカーの批判的実在

論は、2人称の領域に最も焦点が当てられていて、次に3人称的領域、最後に1人称的領域に焦点が当てられている。モリンの複雑性理論は、3人称的領域に最も焦点が当てられていて、次に1人称的領域、最後に2人称的領域に焦点が当てられている。

今朝方の日記でも言及していたように、メタ理論には様々な種類があり、そして様々なものがある。ジェームズ·マーク·ボールドウィン、チャールズ·サンダース·パース、ジャン·ピアジェ、ヨルゲン·ハーバマスらも優れたメタ理論を提唱していたことを見逃すことはできないが、ここで改めてハーゲンス博士の論文を読んでいると、昨今のインテグラル理論や成人発達理論を取り巻く日本の状況については少し注意をしなければならない点があるように思う。

人間発達を探究している者であれば、多種多様な発達モデルが存在していることは理解しているだろうが、今日本で紹介されている発達モデルというのはその極々一部に過ぎない点にまず注意する必要がある。そしてさらに重要なことは、日本で紹介されているそれらの理論は、ウィルバーのインテグラル理論と関係したものであり、ハーゲンス博士の論文で指摘されているように、インテグラル理論がそもそも1人称的な領域に強く立脚して人間発達を捉えている点に注意しなければならない。より具体的に述べれば、その問題とは、人間発達及び社会の発達に伴う規範性に関する議論の希薄さにあると言えるだろう。発達に伴う規範性というのは、発達とは本来何であるかという議論から出発して、同時代の社会·文化的·制度的な観点を考慮して、人間や社会の発達とはいかなるものであるべきかを扱うものである。

インテグラル理論や今日本で知られている発達理論をそうした観点で眺めてみれば、規範性の観点が大きく欠落していることに気づくだろう。規範性の観点と議論の欠落は、発達に伴う歪んだ実践や歪んだ言説を生み出すことにつながってしまう。幾分認知的な負荷がかかるかもしれないが、私たちはウィルバーのインテグラル理論や成人発達理論の盲点に自覚的になり、他のメタ理論を参照しながら——哲学者のザカリー·スタインが推奨しているように、ロイ·バスカーの批判的実在論はインテグラル理論の盲点を補完するメタ理論として有力である——、人間発達や社会の発達に関する議論と実践をより包括的かつ豊かなものにしていく必要がある。規範性に言及したメタ理論を探究することが難しければ、少なくとも発達とは何であり、現在置かれているコンテクストの中において、あるべき発達とはどのようなものなのかについて考えを巡らせてみることが重要だろう。フローニンゲン：2020/7/14（火）10:01

6005. エンリケ·ダッセルの善の思想

時刻は午後7時を迎えた。ちょうど今し方夕食を摂り終えた。今日は時折小雨がぱらつく1日だった。幸にも明日は晴れるようなので、街の中心部にあるオーガニックスーパーに出かけたい。

詩人の石原吉郎がかつて述べた、「見たものは見たと言え」という精神で、体験したものは体験したとして言葉·音·絵の形にしていく日々が続く。知覚体験の1つ1つもまた貴重な存在者なのだ。彼らに居場所を与えるためには、それを体験した都度ふさわしい言葉·音·絵を提供していく必要がある。それらは彼ら自身でもあり、彼らの居場所でもある。1つの体験の訪れは束の間の出来事であり、それは儚い。まさにそこに存在者の命の尊さを見る。

本日もまた、今日という日に自分のもとにやって来てくれた存在者たちに、可能な限り精一杯の言葉·音·絵を与え、彼らが形になってこの世界に現れるようにしていたように思う。明日もまたそうした1日になるだろう。

真善美の探究、とりわけこれまでの自分にとって盲点となっていた善と美の探究の日々が続く。今日は、善と倫理に関する興味深い仕事を残している思想家エンリケ·ダッセル(1934-)に出会った。ダッセルはアルゼンチンとメキシコの2つの国籍を持っており、博士論文として取り上げたのはエマニュエル·レヴィナスとのことであり、彼は長きにわたって倫理について探究をしていたことがわかる。彼の思想で興味深いのは、倫理を形而上学的に扱っているのではなく、グローバル化したこの現代社会の具体的な状況と課題に紐付けて倫理思想を展開している点であり、また彼の出身国である中南米の観点から、グローバル化した現代社会における倫理上の問題を扱っている点である。

来月はヨルゲン·ハーバマスの書籍を多く購入しようと思っているのだが、それらに加えて、ダッセルの“Philosophy of Liberation“と“Ethics of Liberation: In the Age of Globalization and Exclusion”を購入しようと思う。彼は多作な著者だが、英語に翻訳されているものは少なく、おそらく日本語ではまだ一冊も翻訳出版されていないのではないかと思う。こうした善や倫理の探究を、実践霊性学や実践美学と紐づけて行うことはもちろんだが、成人発達理論やインテグラル理論とも逐一対応づけて探究を行う。今朝方も、ピアジェが述べる「規範的事実」という観点から、高度な発達段階の特性について考えていた。具体的には、歪んだ規範的事実を内側に集積した形で高度な認知的発達

を遂げると、そうした歪んだ規範性に基づいて行動をしてしまうという危険性について考えていた。しかもその行動は、高度な認知的発達段階から生み出されるものであるから、その影響力は広く社会に及ぶ危険性がある。

いかなる発達領域であろうとも、高度な発達を遂げていく際には、必ず善を司る領域の発達がなければ、それはとても危険なことである。発達を盲目的に希求しがちなこの社会において、仮にそれを許せるとするならば、善や美の領域における発達だろうか。それらの発達は個人と集合の双方で欠落しており、善と美の発達であれば私たちはより高次元の段階を求めてもいいように思えてくる。この点についてはまた改めて考えていこう。フローニンゲン：2020/7/14（火）19:24

6006. テクノロジーと現代の課題：霊性学と美学に関する規範的かつ実践的なメタ理論について

時刻は午前7時を迎えようとしている。今朝はゆったりと睡眠をしており、起床したのは午前6時だった。寝室と外の気温の差からか、目覚めた時には寝室の窓に水滴が付着していた。今日は小雨が降ることはなく、天気が良いようなので、午後に街の中心部に出かけて買い物をしたい。

絶えず今を絶対的に肯定できる生き方。過去の自分よりも何かしらの点で深さを体現している現在の自分を通じた絶対的な肯定感。それを日々の生活の中で感じる。今を絶対的に肯定できることは、充実かつ幸福に人生を生きる上でとても大切なことかと思う。昨日はふとそのようなことを考えていた。その他にも、昨日はいつもと同じように、雑多なことを考えていたように思う。

1つには、テクノロジーの発達と現代社会の課題の関係について考えていた。テクノロジーの発展が既存の種々の問題を解決してくれるのは確かだが、現代が直面している真に重要な問題の多くは、テクノロジーの発展では解決できないようなものではないだろうか。戦争を失くすために、より性能の高い核兵器を求めるような状況が現代社会の様々な領域で行われているが、これは本当に本末転倒だと思う。現代が直面する真に重要な問題を解決するためには、人間の知性やあり方が深く問われる。私たちは、本当に問われていることが何かを見失っているのかもしれない。成熟した知性とあり方。それらがあってこそテクノロジーの力が活きてくる。そのようなことを改めて考えていた。

2つ目として、ヨルゲン･ハーバマスもまたメタ理論の提唱者であったことについて考えていた。ハーバマスは主著“Knowledge and Human Interests”を通して、人間性に関するメタ理論を構築すること

を狙いとしていた。それは3つの領域から構成されており、それぞれ3人称的、2人称的、1人称的な領域である。3人称的な領域として、チャールズ·サンダース·パースの理論体系を用いて、自然科学の方法による人間理解について深く考察を進めた。2人称的な領域として、ディルタイの理論体系を用いて、歴史的·解釈学的な方法による人間理解について深く考察を進めた。最後に1人称的な領域として、フロイトの理論体系を用いて、精神分析学的な人間理解について考察を深めていき、それら3つの領域を通じた人間理解に対する考察を統合しようと試みていた。

ハーバマスのこうした探究方法を見て、同種の試みを霊性学と美学に関してできないだろうかと考えた。つまり、強固な思想体系を持つ霊性学者と美学者の理論を架橋するような探究ができないだろうかと考えていたのである。霊性学や美学と一口に言っても、そこには異なる人称アプローチがあるであろうから、それぞれの領域の中で重要な仕事をしている学者の思想体系を参考にしながら、霊性学と美学に対してメタ理論的なアプローチを採用する探究をしてみたい。それは博士論文のアイデアの有力な候補である。

鍵は、メタ理論的かつ規範的·実践的な試みということ。メタ理論には様々な種類とアプローチがあり、例えば、1人称的なアプローチだけに焦点を当てたとしても、その範囲でメタ理論を構築していくこともできる。今の自分の関心からすると、霊性学と美学に対しては1人称的かつ2人称的にアプローチをしていくことだろう。このあたりのアイデアについてもゆっくりと洗練させていきたい。フローニンゲン:2020/7/15(水)07:11

6007. 今朝方の夢

ここのところ自分の身に起こっている様々なシンクロ現象は、自分の無意識と他者の無意識のつながりを示唆しているように思う。そうしたつながりが肯定的な形で現れてきている現象をここ最近はよく実感する。一方で、どれだけシャドーワークをしたとしても、個人のシャドーがなくならないのは、シャドーの世界が深いというだけではなく、他者のシャドーの世界の影響を受けているからではないかと思った。つまり、他者さらには社会を含めて、自分以外のシャドーの世界におけるシャドーが治癒をされなければ、それは自分の無意識の世界に入り込み、形を変えて自分のシャドーとして現れてくるのではないかということである。そうしたことを考えてみると、シャドーワークというのは個人で

行うだけのものではなく、集合規模でも進められていく必要のある実践だと思われる。そのようなことを考えながら、今朝方の夢について思い出していた。

夢の中で私は、欧州のどこかの国のある街にいた。その街は、風光明媚の場所であり、海に面していた。雰囲気からすると、マルタ共和国やモナコ公国のどこかの街のようだった。そこで私は、昼の穏やかな太陽の光を浴びながら、小中高時代の友人と歩いてどこかに向かっていた。すると途中で、2人の親友（SH & SI）と偶然出会った。彼らもまたどこかに向かっているようであり、その方向が同じだったので、一緒に歩くことにした。

しばらく歩いていると、私たちはいつの間にか教会の中にいた。教会の中は厳かな雰囲気を発していて、少しばかり薄暗かった。教会の中には小さな部屋がいくつかあり、地下には比較的広い祈りのスペースがあった。地下に降りて行ったところ、祈りのための部屋の物陰に誰かがいるような気配を察知した。その人物が発している気はあまり良いものではなかった。

何か不審な人物がそこにいるという感じがあったのだが、結局その人物の姿を確認することはできなかった。するとその部屋に、高校時代のサッカー部で副キャプテンを務めていた友人が入ってきた。彼はゆっくりと部屋を歩きながら、部屋の点検をしているようだった。ちょうど彼と視線が合い、そこからお互いに歩み寄って少しばかり言葉を交わした。教会の中から外に出ようと思ったところ、先ほどまで一緒にいた友人たちの姿が見当たらなかった。そこで偶然ながら、別の友人（HY）と出会い、彼と一緒に教会の外に出ることにした。

外に出てみると、街を上げてスポーツフェスティバルが開催されていることに気づいた。海に面した道路の上でサイクリングレースが行われていたり、マラソンなどが行われていた。街全体がとても盛り上がっている中で、私はその友人とどこかに向かおうとしていた。道ゆく人たちと逆の方向に進んでいると、そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は綺麗で大きな体育館の中にいた。そこには、実際に通っていた中学校の先輩、後輩、そして同学年の生徒全員がいた。どうやら私は成人の体と頭脳を持ったまま、中学2年生としてそこにいるようだった。その場には全校生徒が各学年ごとに整列をしていた。なぜか私は全校生徒の前で話をすることになり、全員の前に立った。列の後ろの人たちには見えにくいと

思ったので、全員に一度座ってもらうことにして、そこから話を始めた。話のテーマは、人間の成長についてだった。その中で、まずは「水平的成長」という言葉を私は述べた。

その言葉の意味をどれだけの人が知っているのか確かめたかったので、意味を知っている人に挙手をお願いした。すると、1年生は元気良くほとんど全員が手を上げた。また3年生も多く手を上げていたのだが、彼らはなぜかヨガの寝転んだポーズをしながら手を上げており、その姿は奇妙かつ滑稽に思えた。一方で、2年生はほとんど手を上げていなかった。

まず私は3年生の誰かに意味を答えてもらおうとしたのだが、1年生の男子生徒の誰かが冗談めかして、「3年生が意味を知ってるなんて嘘だ。それは偽りだ」と述べた。それに対して体育館全体に笑いが起きたが、彼が述べたことはあながち間違いではないと私も思った。そのため、私は1年生の誰かに意味を聞くことにした。

そこで夢から覚めた。そう言えば、その他にも、大学時代のサークルの合宿として、日本のどこかの温泉街を訪れ、旅館に宿泊していた場面があった。夕食後、先輩後輩を含めたメンバーが畳部屋に集まり、色々と語らっていた。私は、仲良くさせてもらっていた2人の先輩と現在の関心事項や将来について色々と話をしていて、その時の自分は今の自分として話をしていたのを覚えている。フローニンゲン：2020/7/15（水）07:37

6008. 内在化されたイデオロギーを外在化すること：批判的実在論とインテグラル理論の補完関係

時刻は午後7時を迎えた。今日は1日中晴れの予報だったが、午後に雨雲が突然現れ、にわか雨を降らした。ちょうど街の中心部に買い物に出かけようとして自宅を出た直後に雨が降ってきたので、すぐに自宅に引き返すことができた。買い物は明日に持ち越すことにした。自宅に引き返した後に、“Metatheory for the Twenty-First Century: Critical Realism and Integral Theory in Dialogue”の続きを読んでいると、フランスの哲学者ルイ･ピエール･アルチュセールの興味深い指摘に遭遇した。アルチュセールがイデオロギーの性質について書いた記述から色々と考えることがあった。

イデオロギーというのは私たちの主観的なアイデンティに大きな影響を与え、私たちは特定の、あるいは種々のイデオロギーを内在化している。私たちはそうした内在化されたイデオロギーの存在に

往々にして気づくことができず、それらは私たちの認識やアイデンティティを大きく規定している。自我の発達において、こうした内在化されたイデオロギーの存在に気づき、それを客体化させていき、それらによって被っていた諸々の制限や束縛から解放されることは重要なことである。内在化されたイデオロギーを「外在化」するプロセスを通じて、私たちは徐々に内面の解放を実現していく。

一方で、イデオロギーというのは、社会の運営上に必要な面もあり、それが文化やシステムを駆動させているという側面がある。大切なことは、ここでも規範的な観点を持つことであり、既存のイデオロギーに取って代わるより包括的なイデオロギーを醸成することが現代に求められている課題の1つだと言えるかもしれない。

午前中にはまた別の論点について考えていた。それは実在論的なトピックである。目には見えないものの存在を直ちに認めないというのは、存在論の観点から言えば、認識的な誤謬である。バスカーの批判的実在論は、この誤謬について詳しく説明している。

現在読み進めている書籍の執筆者は、各々がインテグラル理論に造詣が深く、私がかつて在籍していたジョン･エフ･ケネディ大学の関係者もいる。彼らも一様に指摘していることではあるが、ウィルバーが提唱したインテグラル理論において、全ての存在に居場所を与えるというテーゼが掲げられている一方で、やはりウィルバーの関心の焦点が認識論に寄っており、存在論についてはそれほど緻密な議論がされていない。逆に、ロイ･バスカーの批判的実在論は、存在論に関して緻密な理論が提唱されているが、認識論の包括性に関して言えばウィルバーのインテグラル理論の方が優れている。端的に言えば、それら2つのメタ理論は補完関係になりうる可能性を有しており、それら2つのメタ理論が相補的な関係を結べば、より包括的なメタ理論を構築することが可能になる。

批判的実在論はインテグラル理論が持つ豊かな認識論的な語彙を活用することができるし、インテグラル理論は批判的実在論が持つ深い存在論的な理解を活用することができる。そうした補完関係によって、さらに包括的なメタ理論の構築が実現され、実践的にも規範的にもより有益なメタ理論となる。今月は折り返しを迎え、来週末からはアテネに行くために読書をする時間がそれほど取れないかもしれないが、今月、そして来月にかけてもロイ･バスカーの書籍を読み通していき、彼が提唱した批判的実在論についてより深い理解を得たいと思う。フローニンゲン：2020/7/15（水）19:22

6009. 美しい朝焼けを眺めて：ジョン・ラスキンとの夢での出会いを思い出して

時刻は午前6時半を迎えた。今朝目覚めた時に目に飛び込んできたのは、美しく輝く朝焼けの光だった。寝室の窓からそれが差し込んできており、オレンジ色に輝く朝焼けをしばらくベットの上で眺めていた。目覚めて1日を始める瞬間に、あのような美しい光景を眺められることほど幸せなことはない。

早いもので、来週の今日、アテネに飛び立つ。実に半年ぶりの旅行である。アテネの滞在中にどこに足を運ぶかの目星は立っているが、具体的にどの日にどこにいくかはまだ決めていない。それは来週のどこかで行っておこうと思う。実際に現地に着いてから、その計画を柔軟に変更していこうと思うので、あまり細かく決める必要はないだろう。今回はゆったりと8泊9日の旅であるから、アテネを十分に満喫できるだろうと思われる。また1つ、自分にとって馴染み深い街ができるであろうことを嬉しく思う。

昨夜就寝前に、何気なく“The Foundations of Aesthetics”という書籍を手に取った。これは、フローニンゲンの街の中心部にある古書店ISISで今から2年前に購入したものだ。中を開けた瞬間に、ある人物の名前が飛び込んできた。それは、美術評論家かつ社会思想家のジョン･ラスキンだった。

ラスキンに関しては、とても印象に残っているエピソードがある。この書籍を購入する遥か前に、私はある日、ラスキンに関する夢を見た。その時は、ジョン･ラスキンという人物について全く知らなかったのだが、夢の中で「ラスキン」という名前が出てきて、「一体これは誰だろう？」と思ったことを覚えている。起床して調べてみるも、すぐにジョン･ラスキンには至らず、しばらくそれが誰なのかがわからない状態が続いていた。その後、ある時ふと、夢の中に出てきた人物がジョン･ラスキンであることを知ったのである。

美術評論家であったラスキンが夢の中に出てきたことと、今自分が美学の領域に関心を持ち、探究と実践をしていることは決して見逃せない繋がりがあるように思える。夢はやはり何かと深く繋がっているのだ。それは自己の存在の最奥や、自己を超えた何かと奥深くと繋がっている。夢に導かれるようにして美の探究に乗り出していた自分が今ここにいることを不思議に思う。

ラスキンについて改めて調べてみると、ラスキンは芸術家のパトロンでもあり、自身も水彩画を嗜んでいた。実際に彼の絵を見たが、彼が好んでいたターナーのように、光の表現がとても上手く、美しさがあった。色々と調べてみると、オックスフォード大学のラスキン･カレッジは彼の名にちなんでいるらしく、いつか足を運んでみたい。またラスキンは、なんと晩年に、霊性の研究にも乗り出していたそうであり、霊性学の探究に乗り出している自分との繋がりをこの点においても見る。

ラスキンへの関心が高まったこともあり、来月は、ラスキンが執筆した“Lectures on Art: Lectures on art”と“Great Ideas On Art and Life”を購入しようと思う。何かラスキンから託されたものがあるように思えてならない。ラスキンとの夢での出会いを大切にしたいと思う。フローニンゲン：2020/7/16（木）06:46

6010. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前7時に近づいている。今朝は起床した瞬間に朝焼けを拝むことができたのだが、本日は1日を通して曇りがちとのことである。幸いにも雨は降らないとのことなので、夕方に街の中心部に買い物に出かけたいと思う。

それでは今朝方の夢について振り返り、本日の創作活動に取り掛かっていこう。今日もまた、創作活動と並行させる形で読書を行っていく。夢の中で私は、見慣れない学校の教室の中にいた。そこは私が通っていた学校ではなかったのだが、教室には小中高時代の友人たちが入り乱れてそこにいた。

外は幾分暗い印象を受けたが、教室の中は明るくかった。しかもその明るさは、蛍光灯によってもたらされたものではなく、外は暗いのだが、なぜだか自然光によって部屋が明るくなっていた。教壇には小学校6年生の時にお世話になった先生がいた。先生は私に1つ仕事を任せ、私はその仕事を行おうとした。それは、生徒の名前を呼び、彼らが注文した本を彼らに手渡すというものだった。

私は生徒の名前を呼び、本を渡し始めたのだが、知っているはずの生徒の名前を呼び間違えてしまうことがあった。書籍には1人1人の生徒の名前が刻まれていたのだが、彼らの漢字をどういうわけか読み間違えてしまうことが多かった。実際に1人、高校時代のクラスメートの女子生徒の名前を読み間違えてしまうと、彼女は大きな声を出してそれを訂正した。すると先生は笑いながら、私はクラ

スをまとめ、クラスを大きく動かしていくことは得意だが、目の前にある誰にでもできそうな仕事に関しては不得意だと指摘した。先生の指摘を私もその通りだと思った。

そこから引き続きその仕事を行っていくと、名前を呼んでも本を取りに来ない生徒がいて、どうやら彼らは欠席のようだった。全ての生徒の名前を呼んだ後、結局何人かが本を取りに来なかったので、彼らの書籍をスーツケースに詰めて、それを倉庫に保管しに行くことも私の仕事の一部だった。スーツケースを引きながら教室を後にし、私は倉庫に向かった。倉庫もまた1つの教室のようであり、そこはとても広かった。

私たちのクラスの荷物を保管する場所までやってくると、すでに誰かが忘れ物やお菓子などをそこに保管していた。するとそこに、ヨガ仲間の女性の知人が現れた。知人の存在に気づいた時、周りにもクラスメートが多くいることに気づいた。そしてその方が私に、「加藤さんは女性とお付き合いを始めたらどうなりますか？」と尋ねてきた。それに対して私は、「今よりもずっと優しくなると思います」と答えると、その方も含め、クラスメートたちも笑っていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面もまた学校の教室にいた。今度の教室は、実際に通っていた中学校のものだと思うが、教壇に立って授業をしていたのは高校時代の古文の女性の先生だった。先生は熱心に板書をしており、何が書かれているのかを見たところ、すぐにはそれが理解できなかった。古文の原文がそこに書かれていて、読解のポイントを先生が説明し始めても、私はいまいちそれがよく理解できなかった。そのため、黒板に書かれていることをとりあえずノートに書き取っておこうと思ったのだが、どういうわけか何人かの生徒たちがすぐにそれを消してしまった。そこで私は、もう高校には通っていられないと思い、高校を辞めようと考えた。高校に通って勉強するよりも、自分1人で自分のペースで勉強した方がよほど身になると思ったのである。

そのような決意が芽生えたところで夢の場面が変わった。今朝方はその他にも、サンフランシスコ国際空港の中にいる夢を見ていた。そこで様々な国の航空会社の職員の外国人たちと話をしており、彼らは自国に戻るまで空港で勤務している期間、1日ほど観光できる日があるようだった。それを聞いた時、私の体は空港の外にいて、空港が見えるカフェでくつろいでいた。その日は晴れであり、空は綺麗だった。時折上空には飛行機雲が見えた。サンフランシスコの気候を味わいながら、

パラソルの刺さったテーブル席で飲み物を飲もうとすると、近くに小中高時代の親友(HO)がいることに気づき、彼に話しかけた。そんな夢の場面もあった。フローニンゲン:2020/7/16(木)07:12

6011. 関係性と創造性及び対話の大切さ

時刻は午前11時を迎えた。先ほどまで読書をしており、これから正午までの時間は再び作曲実践をしようと思う。ここ最近は、曲の原型モデルを作ることをしておらず、これまで作ったモデルをもとに作曲をすることが多かった。それに加えて、ハーモニーの理論書に掲載されている譜例をもとにして曲を作っている。

今日からはまた1日に2つずつぐらいは新しいモデルを作っていこうかと思う。1日に多く原型モデルを作るのではなく、毎日コツコツと新しい原型モデルを作ることによって、日々新たな学びを得たいと思う。そうなってくると、日々の作曲実践は3つのパターンから曲を作っていくことができる。1つ目として、新しい原型モデルをもとにした作曲。2つ目として、既存の原型モデルをもとにした作曲。3つ目として、理論書の譜例をもとにした作曲がある。こうした形で曲を作っていけば、それぞれのアプローチから新たな学びが得られるだろう。また曲作りが単調にならず、常に新しい刺激を得ながら曲を作ることができる。そのため今日からまた原型モデルを少なくとも1つは必ず作っていくようにしたい。

今朝方ハーグに住む友人のブログを読んでいたところ、興味深い記述があった。それは、創造性と人間関係は深く関係しているのではないかという問題意識であった。この点については、私も思うところがあり、興味深く記事を読んでいた。おそらく創造性というのは人間関係にとどまらず、その人と他の全ての存在者との関係性によって発揮され、また育まれていくものだと思われる。ここで述べている存在者というのは、先日の日記でも言及した通り、他者、モノ、自然、概念も含めた存在のことを指す。日々創作活動に従事していると、そうした存在者との交流がいかに自分の創造性の発揮と涵養にとって重要かがわかる。

友人はさらに、それぞれの人が、それぞれに対話のパートナーを持っている世界について思いを馳せており、私もその点に共感した。ここでも対話のパートナーは人間である必要はなく、全ての存在者を対話相手とみなし、彼らと実際にどのような対話ができるかが鍵を握るように思う。

これまで気づくことができなかった多様な存在者の存在に気づき、彼らと深く対話を行うことが当たり前になる世界の実現を望む。私たちにとって深い呼吸をすることが当たり前になり、絶えず自分とつながっていることが当たり前になることもまた望むことである。自己との深いつながりを取り戻し、そうした繋がりの中で、善や美が体現された行動が当たり前にになることもまた望むことである。

深い呼吸を絶えずするかのごとく善や美が体現された行動で溢れるような社会の実現。世界が少しでもより平穏になるために、善と美に溢れた行動と対話については、様々な角度から考えを深めていきたいと思う。フローニンゲン:2020/7/16(木)11:20

6012. 活気が戻ってきたフローニンゲン:宇宙空間の果てに飛び立つ知覚体験

時刻は午後7時を迎えた。気がつけば今週も終わりに近づいてきており、明日は金曜日となる。

今日は夕方にジョギングがてら街の中心部に買い物に出掛けた。すると驚いたことに、先週よりも人が増えていて、マルティニ教会前の広場に出店が戻ってきており、人々の姿を多く見かけた。中心部の通りを歩いていても同じことを感じ、コロナ前と変わらないほどに人々が行き交っていた。もちろん、まだどの店に入る前にも手を消毒する必要があるのだが、街に人々が戻ってきて活気に溢れている様子を久しぶりに見ることができた。

今日は2つほどオーガニックストアに足を運び、最初の店でヘンププロテインと小麦若葉のパウダーを購入し、それらに合わせてクロレラとスピルリナが半分半分入ったパウダーを購入した。これまでは近所のスーパーで、瓶詰めのクロレラのパウダーを購入することができていたのだが、それがもう入荷しなくなってしまい、代わりにモリンガのパウダーを味噌汁に入れていた。

以前からクロレラとスピルリナが半分半分に入ったパウダーの存在を知っていたのだが、今日初めて試してみようと思った。宇宙食としての研究が進められているそれらの栄養価と味を考えたとき、このパウダーを味噌汁に入れたくなった。過去にもスピルリナのパウダーも摂取していたことがあるのだが、個人的にはスピルリナよりもクロレラの方が味がよく、味噌汁にもよく合う。今回は半分半分それらが入っていることもあり、スピルリナ単体の時よりも味噌汁とのマッチングが良いことを願う。

今日は午後に仮眠を取っている最中に、とても印象深いビジョンを見た。仮眠をしてしばらく経ってから、意識がコーザル意識の状態になり、そこから再びサトル意識に戻ってくるときにそのビジョンを知覚した。これはビジョンかつ身体感覚の伴う体験であった。

突然、地球外に自分の意識が飛び出していき、地球からどんどんと遠ざかる方向に意識が飛び立っていくビジョンを見た。最初私は、もう地球に意識が戻ってこれない恐怖心が強くあったが、ある地点で、地球から離れていくことに対する好奇心が恐怖心に勝り、もう私は地球に戻ってこれない覚悟で、地球から一気に離れていった。すると、意識が宇宙の果てに向かって尋常ではない速度で飛んでいった。宇宙空間に高低があるのかわからないが、地球の位置からすると、一気に宇宙空間を上昇していく感じだった。

するとそこで自分の身体に強い電流のようなエネルギーが流れ始めた。ベッドの上に横たわっている全身が金縛りに遭ったかのように、全身が電気のような強いエネルギーに包まれたのである。身体に強い電気のようなものが流れる体験は比較的多くするため、それほど驚くことではなくなっているのだが、如何せんそのビジョンが強烈なものであったため、身体に流れるエネルギーも幾分強く感じられた。

「見たものは見たと言え」という精神で、「知覚したものは知覚した」という形で文章を今書き留めてみた。このところ、再び自分の中で情熱を傾けられる探究テーマが見つかり、そのテーマに関する書籍を毎日読み進めることによって、自分の内側に情報エネルギーが高まっていたことと、自己が再び既存の自己の殻を破って超越しようとする時期に差し掛かっていることが、そのような知覚体験をもたらしたのかもしれない。フローニンゲン：2020/7/16（木）19:21

6013. ロイ・バスカーへの共感の念

時刻はゆっくりと午後7時半に近づいている。振り返ってみれば、今日もまた非常に充実した1日だった。十分に創作活動に打ち込むことができ、読書も存分にできた。明日は「一瞬一生の会」の補助教材として、いくつか音声ファイルを作ろうと思う。

今日は午前中に“Metatheory for the Twenty-First Century: Critical Realism and Integral Theory in Dialogue”を読み終え、その次に“The formation of critical realism: A personal perspective”に取

りかかり始めた。こちらの書籍は、バスカーの幼少期のエピソードから始まり、生涯にわたってどのようなプロセスでバスカーが思想体系を構築していったのかの変遷がわかる優れた書籍である。文章の形式も、バスカー本人に対するインタビュー形式のため、バスカーの肉声を聞いているかのような形で食い入るように読み進めることができた。気がつけば、細かい字で200ページほど書かれたこの書籍も、あと2章ほどで初読が終わる。

本書を読みながら、いくつも興味深い記述に出くわしたのだが、中でも印象に残っていることを書き留めておきたい。1つには、バスカーはイギリス人なのだが、家系にインド人の血が入っていることもあり、幼少時代はそれが理由でいじめに遭っていたそうである。この幼少期の頃の体験が元になって、バスカーは人間の解放と自己実現に関心を持ち、それを当初は経済学を通じて実現する道を探っていった。ところがオックスフォード大学時代にそのアプローチが変わり、人間の解放と1人1人の人間が自己実現する道を探究するアプローチとして哲学を選んだ。

以前の日記でも書いたことだが、バスカーが経験したような自分のシャドーを形成する疎外体験というのは、1人の学者や芸術家の活動の根源に関わるものであることが往々にしてある。バスカー自身も幼少期の体験が自分のシャドーを形成していることを自覚しており、同時にそれが負の側面として現れてくるのではなく、社会正義を希求する思索活動の支えになっていることにも自覚的である。バスカーと同様に敬意を評している哲学者の中で、ザカリー・スタインもまた同種の体験を幼少期の頃にしている。彼の場合は、失読症による不公平さを既存の学校システムに対して感じたことと、彼の妻を襲った医療事故が現在の彼の活動の根源にある。

バスカーはそれ以外にも疎外体験をしている。バスカーはオックスフォード大学で博士号を取得して以降、哲学者としてのキャリアを順調に重ねていった。しかし、哲学者として脂が乗ってきた頃に執筆した主著“Dialectic: The Pulse of Freedom”を執筆している最中にも知的疎外体験をすることになった。その仕事は革新的なものであり、同時に彼の研究分野において物議を醸すものでもあった。

バスカーの言葉で感銘を受けたのは、本当に創造的な仕事を実現するときには必ずこの種の疎外体験が付き纏うと述べていたことである。その仕事が革新的なものであればあるほどに、理解者は極々限られており、それゆえに往々にして疎外体験が付き纏うのだ。

そこからもまたバスカーの生涯を辿っていったとき、さらに興味深いのは、バスカーが霊性探究に関心を大きくシフトしたことである。どのようなきっかけでそれが起こったのか、本日この書籍を読むまで私は知らなかった。バスカーが霊性の探究に乗り出したきっかけは、1994年にバカンスでキプロスを訪れた際に、ひどい風邪を引き、そこで偶然にレイキを勧められ、その治癒体験がきっかけとのことだった。私自身がレイキの実践者でもあるため、まさかバスカーとレイキという観点で繋がっているとは思っても見なかったのである。

またその女性のレイキの施術者の旦那さんは超越瞑想の実践者でもあり、バスカー自身も超越瞑想のコースに参加していたことが書かれていて、大変興味深くなった。バカンスを終えたバスカーはイギリスに戻り、哲学者らしく、緻密なアプローチを持って、諸々の神秘主義的な実践技法を探究していった。その探究の成果としては、まだ読んでいないがすでに手元にある“From East to West: Odyssey of a Soul”の中でバスカーの霊性に関する思想がまとめられており、そこから思想体系をより洗練した末に執筆されたのが、先日読み終えた“The Philosophy of Meta-Reality: Creativity, Love and Freedom”である。

改めて、キプロスでの体験が、バスカーにとって内面への目覚めの転換となったことは興味深い。その体験をする前のバスカーは哲学の領域で仕事をしていたが、自身が述懐するように、物質的な面ばかりに意識が向かっていたと述べている。それはまさに自分が内面探求への目覚めの際に体験したことと似ており、そうした観点においてバスカーがとても近しい存在に思えてきた。ここからも引き続き、バスカーの思想体系を探究していく。フローニンゲン：2020/7/16（木）19:48

6014. フローニンゲンとアテネの気温差：読書と創作活動

時刻は午前6時半を迎えた。今朝は少し雲があるが、目覚めの瞬間には朝焼けが見えた。今年は冷夏ということもあり、とても肌寒い日が続く。明日は少し気温が上がるようだが、それでも24度までしか気温が上がらず、涼しさを感じられるほどである。

来週の木曜日からアテネ旅行が始まり、その時のフローニンゲンとアテネとの気温差はかなりある。フローニンゲンのその日の最高気温は20度、最低気温は12度と、それでも直前の数日よりも暖かいのだが、アテネは最高気温34度、最低気温24度とのことである。やはりフローニンゲンの最高気温がアテネの最低気温に満たないような気温差だ。気温への適応に関してはすぐに行えるだろうが、

一応それくらいの気温差があることを覚悟しておこう。持っていく衣類に関してもアテネの気候に合わせたものにしていく。

昨夜、iPad Proで現在使っている絵画創作アプリが自動でアップデートされており、背景として使える紙の材質の種類が増えていて喜んだ。これでまた少し新たな気持ちで絵を描いていくことができるだろう。引き続き、内的感覚が形になるがままに任せる形で筆を動かしていこう。これを継続させていく過程の中で、内的感覚の成長と技術の成長が緩やかに進んでいき、絵の表現がまた変わっていく可能性もある。それは多分に未知なのだが、それがまた楽しみである。

昨夜はその他にも曲の原型モデルを作っていた。予定通り2曲ほど原型モデルを作ったのだが、夜もまた少し読書をしたいため、原型モデルの制作は1曲分で良いかと思った。その代わりに、毎日1曲は新しい原型モデルを作っていく。それによって、作曲に関しても日々新たな気持ちで取り組める度合いが増すだろう。ゆっくりとでいいので、毎日1曲原型モデルを作っていこう。

夜の読書に関しては、ロイ･バスカーの生涯をインタビュー形式で振り返る書籍を読み終えた。今後もまた折を見て本書を読み返すだろう。今日からは、またバスカーの書籍を読み進めていくのだが、その中でもバスカーの主著の1つである“Dialectic: The Pulse of Freedom”に取り掛かる。本書は各方面で引用されており、私が以前師事していたオットー･ラスキー博士もよく自身の論文の中で引用していた。本書は400ページほどあり、文字も大きくないため、本日中に初読を終えることができるか分からないが、午前、午後、夜の3回に分けて、できるだけ読み進めていきたい。

バスカーは様々な概念を提唱しており、それらの意味と関係を掴むのは最初のうちは苦労するのだが、本書にはそれらの意味と関係を示す図が豊富に掲載されているので、まずはそれらの図から読み解いていくのもいいかもしれない。昨夜中身をパラパラと眺めながらそのようなことを思った。

読書によってマインドが刺激と啓発を受けており、創作活動と相乗効果を発揮していることに気づく。ここ最近のように、読書と創作活動をうまく並行して実践していく日々を今後も過ごしていこう。フローニンゲン：2020/7/17（金）06:48

6015. 憤りを感じさせる今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前7時に向かっている。今日は1日を通して曇りのようだが、雨が降らないので幸いである。また雲に関しても、現時点では分厚い雲ではなく、うっすらとした雲のため、太陽の光が少し地上に透き通ってきている。

夕方に近所のスーパーに買い物に行き、もうオーガニックのサツマイモが入荷されないとのことだったので、今日からはオーガニックのブロッコリーを購入することにする。それを茹でたものを野菜と椎茸入りの味噌汁に入れる。

今朝方もいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、日本のどこかの街のセミナー会場にいた。そこで長らく付き合いのある知人の方とセミナーを一緒に開催していた。その方と私は壇上に準備されていた椅子に腰掛けており、対話形式でセミナーを進めていた。会場には成人発達理論やインテグラル理論に関心のある方が集まっており、中でも教育関係者が多い印象を受けた。

対話があるところまで進んだ時に、知人の方が会場全体に1つの提案を行った。それは今度、有志を募って書籍を出版しようというものだった。お互いの知見を持ち寄って書籍を出版することに私も意義を感じた。ところが、ある学校に勤める教師の方が、「うちの学校の校長がそうした活動に対していい顔をしないんです」と述べた。それに対して知人の方がその方に質問をしてみると、何やらその学校の校長は、先生たちが課外活動に勤しみ、本業が疎かになることを嫌がっているらしかった。またその校長は、「人件費がかからないのであれば大丈夫です」というようなことを述べたらしかった。それを聞いて私は、校長の視野の狭さと発想の貧困さに憤りを覚えた。

先生方は自発的に学習と実践をしようとしているのに、その情熱をへし折るような考え方を持っている校長に呆れてしまったのである。私はその学校の先生に、「今の話は冗談ですよね？」と述べた。すると、「いえ、うちの校長はそのような人間です」という返答が返ってきた。それに対して私はさらに、「そのような馬鹿なことを述べる人間が校長など務まるはずはないでしょうし、逆に、そのような馬鹿を校長にしてしまうほど未熟な学校なのでしょうか？また、そのような馬鹿が平然と存在していられるほどに教育界は未熟であり、そうした馬鹿が校長として敬意を表される未熟な社会に私たちは生きているのでしょうか？」と述べた。

すると、知人を含め、会場中は静まりかえった。そこから私の体はその校長と喧嘩がしたくてウズウズし始め、「実は私は喧嘩っ早いので、もしそんな馬鹿が本当に校長で、彼がこの場にいたら、一言言葉を交わした後に殴り合いをしたいと思います。おそらくお互いに殴り合えば、それによって関係性を深めることができると思うんです」と述べた。するとその場はますます静まり返っていた。そこでいったん目覚めた。

この夢は久しぶりに自分の攻撃性を示すものだったように思う。さらには、自分の中にある、社会に対する憤りや問題意識のようなものが色濃く現れているようにも思える。まさに昨夜ロイ･バスカーやザカリー･スタインといった哲学者たちの根幹にある、彼らの仕事を支えてきたシャドーの話ともつながる。その夢から目覚めた時、時刻は深夜だった。その校長の馬鹿さ加減にまだ感情的なチャージがあり、ぶつぶつと独り言を述べ、大きな呆れ笑いをした後に、再び夢の世界に戻って行った。
フローニンゲン：2020/7/17（金）07:07

6016. シャドーに関する規範的な議論と実践の必要性～無意識という生態系

つい今し方書き留めた夢に関して、私は視野が狭く、発想が貧困な人に対して憤りを感じるわけでは決してない。何よりも、自分を含め、人は誰しも各人固有の発達段階を通じて生きており、それは私たちの視野や発想を縛るものであるため、差異があって当然なのだ。

私が憤りを感じるのは、視野が狭く、発想が貧困な人が階層的な社会システムの中で影響力のある立場に立ち、彼らの影響力が他の人の自由と可能性を制限する場合に大きな憤りを感じるようなのだ。夢の中で自分が極度に攻撃的になり、殴りかかったり、殺しにかかったりするのはそうした人間たちに対してである。夢の中では確かに、対象は人間の姿をしているが、それはひょっとすると、この現代社会の風潮や仕組みなのかもしれないと思った。端的には、私は現代の歪んだ風潮や仕組みに対して大きな憤りを感じており、それが人のシンボルとして夢の中に現れているのではないかと思ったのである。

最近読み進めているロイ･バスカー、ヨルゲン･ハーバマス、ザカリー･スタインと同じように、この社会の人間が制約から解放され、彼らの可能性が解放されることを強く願う自分がいるようだ。

夢の中の私は、社会の歪みがシンボル化された個人に対してまずは言葉で攻撃をし、その後身体を通じて攻撃を行う。それは1つのパターンのようだ。ここでも現代の課題に対して知的に取り組もうとするのではなく、肉体を通じて体当たりする形で課題と向き合っていこうとする自分の姿を見る。夢はボディとマインドを超えて、ソウルやスピリットの領域とも関わるものであることを考えると、心身だけではなく、魂や精神を通じて、すなわち自分という人間の全存在をかけて現代の課題に取り組もうとしている姿をここに見る。あとは、夢の中の自分がもう少し成熟し、冷静になることが必要なのだろうか。あるいは、あれくらい喧嘩腰のエネルギーを持っておいた方がいいのだろうか。

かつて映画監督のデイヴィッド･リンチが自分の活動の根源には深いシャドーがあることをわかっていて、そのシャドーを治癒することを極度に嫌がった話を思い出す。リンチがシャドーワークを行い、仮にそれが治癒されてしまったら、彼の独自性が滲み出すことはなく、社会の闇を照らし出すような一連の作品は生まれてこなかっただろう。

そのようなことを考えてみると、シャドーに関しても治癒されるべきものと、治癒しないままに自分の中で大切に保持しておくべきものがあるように思えてくる。後者に関しては、それは創造性の源になるようなものであり、社会を変革していく際のバイタリティーを生み出すものだと思われる。シャドーに無自覚なことは危険だが、一方で全てのシャドーを治癒すべき対象だとみなすのも危険なのではないだろうか。シャドーにも様々な種類が存在しており、シャドーに対する理解と語彙が貧困な場合には、全てのシャドーを一緒くたに扱ってしまい、それら全てを治癒するような方向に向かってしまう。

私たちの腸には善玉菌と悪玉菌が絶えずいて、それらが調和を生み出しながら1つの生態系を作っている。シャドーに関しても同じなのではないだろうか。ゴールデンシャドーとダークシャドーが私たちの無意識の世界にいて、ダークシャドーを全て解消しようとするのは、無意識の生態系を崩しかねないのではないだろうか。私たちの社会や惑星が多様性によって支えられているのと同じく、無意識も多様なシャドーの調和によって生態系が維持されているのではないかと思う。

シャドーの取り扱いについては慎重な議論と実践が必要であり、いかなるシャドーが治癒されるべきなのかに関しては、規範的な議論と実践が不可欠である。フローニンゲン：2020/7/17（金）07:27

6017. 倫理学・道徳学・価値論を通じた霊性探究：今朝方の夢の続き

時刻は午前7時半を迎えた。今日は金曜日であるから、いつものように洗濯を始め、先ほど洗濯機を回した。その際にふと、先ほどの日記について思い返していた。1つ前の日記では、シャドーの取り扱いに関する規範的な議論と実践の必要性について書き留めていたが、それは霊性に関する議論と実践においても全く同じであると思った。

現代において霊性の取り扱いが歪んだものとなり、それをうまく育むことができないのは、このあたりに問題があるのではないかと思ったのである。とりわけ今の私は霊性と美に関心があり、おそらくはどちらの領域に関しても規範性は大事になってくるだろうと思われるが、とりわけ霊性に関しては、倫理学（ethics）・道徳学（moral philosophy）や価値論（axiology）の観点から探究を進めていこうと思う。

倫理学や道徳学については少しばかり書籍が手元にあるため、後者の価値論に関する書籍を求めるべく、“axiology”で検索をかけてみたところ、いくつか興味深い書籍を見つけたので、また来月以降に購入する予定の文献リストに加えた（“The Essentials of Formal Axiology,” “The Structure of Value: Foundations of Scientific Axiology,” “Five Lectures on Formal Axiology,” “Radical Axiology: A First Philosophy of Values″の4冊）。

今朝の夢が思わぬ形で探究の後押しになった。今後は、規範性という観点を大きな軸として探究と実践を進めていこう。それでは朝の創作活動に入る前に、夢の続きについて書き留めておきたい。夢の中で私は、日本とどこかの外国が混じり合ったような国にいて、列車に乗っていた。その列車は日本製のものだった。

どうやら私は何者かに追われているようであり、列車から脱出する必要があった。そのため、最後尾の車両に行き、ドアを開け、タイミングを見計らって線路に飛び降りた。そのタイミングを見計らうことがなかなか難しく、反対車線から列車がこないどうかを確認したり、近くに通過駅があってそのプラットホームにぶつからないかどうかなどを確認していた。無事に線路に飛び降りることができた私は、すぐに線路から離れ、道路に出た。すると、鼻歌を歌いながら自転車を漕いでいる警察官に、

線路から出てくるところを目撃されてしまい、まずいと思った。そこから私は空を飛び、急いでその場から離れた。

しばらく空を飛んでいると、眼下に懐かしい場所が見えた。そこは、幼少時代に三鷹に住んでいた時に通っていた学校と自宅との間にあった公園があった。公園のフェンス脇には小学校低学年の子供が通れるぐらいの細い道があり、そこは学校の行き来において近道の役割を果たしていた。私は地上に降り立ち、その道を通ってみようと思った。

すると突然、その道が見る見るうちに大きくなり、まるで山が切り開かれて道ができるかのように巨大なものになった。裸の山道の脇に、木がポツリポツリと植えられていて、幼少期に通った公園の脇の細い道とは似ても似つかないものになった。その山道を登っていくと、見晴らしの良い場所に出た。そこから町全体を一望できたのだが、その町は馴染みのないものだった。

すると、後方に人の気配を感じ、先ほど列車の中で自分を追いかけていた人物がまたしても自分を追っているのかと思った。その人物の姿を確認することはできなかったが、とにかくすぐにその場から逃げようと思った。すると、私の体はその山とどこかの建物が混ざったような場所にいた。より具体的には、両脇には山道が広がっているのだが、そこは教室か会議室かのような場所だったのである。私はその部屋の窓際にいき、高い壁をよじ登った。そしてそこから再び空に飛び立ち、山から町の方向に向かって滑空して行った。

次の夢の場面では、私はイタリアのどこかの街のスーパーにいた。そのスーパーにはスペインで活躍するあるサッカー選手とその奥さんと一緒に買い物に出かけていた。早速店内で今日の夕食の素材を選んでいると、イタリア人の店員の中年男性に声を掛けられた。彼は私たち全員独身かと尋ね、それに対して私は、2人は結婚していると述べた。するとその男性は笑みを浮かべながらも少し残念そうにしており、どうやらその男性はそのサッカー選手の奥さんの美貌に惹かれていたようだった。

今朝方はその他にも、大学時代にお世話になっていた経済学部のある教授が夢の中に出ていた。その先生の授業を受け、授業が終わった後に少しばかり談笑していたのを覚えている。フローニンゲン：2020/7/17（金）08:08

6018. ジャン･ゲブサーの書籍と悪に関する書籍：規範的対話の必要性

時刻は午後3時半を迎えた。この日記を書き終えたら、近所のスーパーに買い物に出かけようと思う。今日は1日中曇りかと思っていたら、午前中には随分と晴れ間が広がっていた。今も完全な曇りではなく、うっすらと太陽の光が地上に差している。

午前中に、ジャン･ゲブサーの主著“The Ever-Present Origin”が郵便受けに届いていた。この名著については10年以上も前に知っていたのだが、まだ読んだことがなかった。言い方を変えれば、まだそれを読む内的必然性がなかったのである。それが先日ふとしたきっかけで本書と再会し、オハイオ大学出版からかなり安く出版されていることに気づき、イギリスの書店に注文していた。届けられた書籍の中身を早速眺めてみたところ、とても細かい字で600ページほどあることに気づき、全てを読み通すのには時間がかかるかと思った。またそもそも、全てを読み通す必要はなく、自分の関心のある章だけ読み進めていく方が賢明かもしれない。具体的には、ゲブサーは本書の中で人間の意識の進化と音楽や絵画と絡めて論じている章は必ず読もう。また、意識の発達と時間に関する章、魂と精神の歴史に関する章、意識の発達と倫理に関する章なども読んでいく。

人間や社会の発達、そして霊性や美をどのように扱い、どのように扱うべきなのかに対する関心が高まる。それらを扱っていく際に、倫理･道徳･価値の観点は不可欠である。そうした観点が扱われていないから、現代社会において人間や社会の発達、及び霊性や美を育む議論や実践が危ういものになっているのではないかと思う。

倫理･道徳･価値の観点に加えて、悪についても関心があり、それはシャドーとも密接に関わったものである。悪に関していくつか良書を見つけ、取り急ぎ来月には“Philosophy of Evil”を購入しようと思う。規範性や悪に関する観点が欠落した議論や実践では、真に人間の解放と可能性を開くことが実現され得ない。そうした観点から探究をより一層深めていこう。

来月にハーバマスの書籍を一括注文する前に、手持ちの書籍を改めて読もうと思う。何冊かあるうちで、背表紙のタイトルを見て関心を引いたのは、“Communication and the Evolution of Society”と“Moral Consciousness and Communicative Action”である。それらは、コミュニケーションと規範性について探究するにはうってつけの書籍かと思う。

先日の日記で書き留めたように、規範性に関する対話という観点と、規範性をもとにした対話という観点があり、それらの観点が含まれた対話実践が現代社会でますます求められているように思う。規範性なき対話は、私たちをどこにも導かない。現代社会には茶飲み話はもうたくさんある。必要なのは、真に人間と社会に解放をもたらし、その可能性を開くような規範的対話なのだと思う。フローニンゲン:2020/7/17(金)15:37

6019. 今というこの瞬間を人生の最後の瞬間と同じように生きること

時刻は午後7時を迎えた。今、穏やかな雰囲気を発している夕方の空に夕焼けが見える。空には雲が多いが、それでも夕日の輝きを拝むことができるのは、なぜかとても安堵する。

夕食の準備をしながら、自己は関係性の産物であるということについて考えていた。人と人、人とモノ、人と自然の関係性の希薄さが進行する現代社会において──あるいは、人がモノへの執着と依存を高めるような現代社会において──、私たちはもう一度この点を思い出す必要があるのではないだろうか。

関係性の質を豊かにすることは、人生の質を豊かにする。日々、関係性を豊かにすることへの意識を高めることはできないか？あるいは、そもそも自分を取り巻いている豊かな関係性に感謝の念を持って絶えず自覚的になれないだろうか？そのような問いを改めて自分に投げかけていた。

そこから私は、自分はこの人生の最後の瞬間をどのように過ごしたいと思っているのかを考えてみた。この問いへの回答は、人生の最後の瞬間だけではなく、そっくりそのまま今という連続的な瞬間瞬間においても大切にするべき生き方だ思ったのだ。

いったい何人の人が、人生の最後の最後の瞬間にカネを稼ぎたいと思うだろうか？いったい何人の人が、人生の最後の最後の瞬間に人に妬み恨みの混じった非難をしたいと思うだろうか？いったい何人の人が、人生の最後の最後の瞬間に人に対して不親切に行動したいと思うだろうか？もし人生の最後の最後の瞬間にそれらをしたくないのであれば、なぜ今この瞬間にそれらをするのを止めないのだろうか？

自分はきっと、この人生の最後の瞬間を最愛の人たちと一緒に過ごすに違いない。それができなかったとしても、そのように過ごしたいと思うに違いない。最愛の人たちが物理的に近くにいなくても、彼らのことを思ってあの世に旅立つに違いない。そうであれば、今この瞬間もそのように生きるのが当然ではないだろうか。また、日々関わる他者を最愛の人たちの中に含めることはできないだろうかと考えていた。そうすれば、日々の瞬間瞬間におけるコミュニケーションは、最後の瞬間と同質のものになり得るのではないかと思ったのだ。

単純に今この瞬間を生きるのではなく、今というこの瞬間を人生の最後の瞬間と同じように生きること。そうした生き方にはまだまだ程遠いが、それこそが充実感と幸福感に満たされた生き方なのではないかと思う。フローニンゲン：2020/7/17（金）19:29

6020. 霊性の物質化の進行と本日届いた書籍について

今日は午前中にロイ･バスカーの主張“Dialectic: The Pulse of Freedom”の初読を終えた。隅々まで読み通したわけではなく、今の自分が大切だと思うテーマだけを読み進めていった。そうでもしなければ、バスカーの哲学書を読み進めていくことはできない。手持ちの他のバスカーの書籍に関しても、今その瞬間の自分が大いに関心を持っているテーマについて読み進めていく。そのように読書を進めていくことが、真に実りある知識の獲得につながり、真に自分の思考を深めてくれる学習になる。

夕方から、チョギャム･トゥルンパの“The Sacred Path of the Warrior, Cutting Through Spiritual Materialism, and The Myth of Freedom”を読み始めた。この書籍については以前にも言及したことがある。端的には、トゥルンパは、人々が霊性に関する種々の実践を通じて、自らの霊性を育んでいるのではなく、自らの自我中心性を強めてしまっているという罠について警鐘を鳴らしている。霊性の実践を自我中心性の強化のために活用してしまう傾向に対して、トゥルンパは「霊性の物質化」という言葉を当てている。

そもそも自我は、いかようなものも全て自分の保全のためにずる賢く活用するという特性がある。霊性に関する種々の実践もそのような形で利用されてしまうのだ。自我のそうした特性に加えて、個人のシャドーや社会のシャドーの問題も絡めると、霊性の物質化の問題は根が深く、対処が難しい。

規範的側面を考慮に入れた実践霊性学は、この問題に対して光を与えるべきものである必要がある。

夕方、到着を待ちに待った書籍がイギリスより届けられた。届けられたのは、“Desire in Chromatic Harmony: A Psychodynamic Exploration of Fin de Siècle Tonality”という書籍である。本書はオックスフォード大学出版から先月末に出版されたばかりの本であり、予約注文していた音楽理論書である。本書は、ハーモニー空間を通じて、半音階進行が聞き手にどのような心理効果を与えるのかについて解説している。分析の観点として、ショーペンハウアー、フロイト、ラカン、リオタール、ドゥルーズらの思想を参照している点が興味深い。本書にはもちろん譜例が掲載されているので、理論的説明を読みながら、自分でそれらの譜例を作曲ソフト上に再現して、その譜例が持つ心理的効果について確かめたいと思う。

現在、哲学書を大量に読み進めており、それらの読書の合間合間に、音楽関係の書籍を読み進めたいと思う。読書による刺激と啓発を得ながら、明日からもまた充実した1日を過ごしていこう。フローニンゲン：2020/7/17（金）19:47